法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

# 『歴代表文集』注訳(二)

安藤, 信廣 / アンドウ, ノブヒロ

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
14
(開始ページ / Start Page)
425
(終了ページ / End Page)
451
(発行年 / Year)
1988-03-05
(URL)
https://doi.org/10.15002/00015662

# 『歴代表文集』注訳(二)

安藤信広

一、本稿は、楚南家文書（現在福岡県在住の楚南家から、法政大学沖縄文化研究所に寄贈された四五点2百冊の文書をいう）に含まれる『歴代表文集』の注訳である。

一、『歴代表文集』は、琉球国中山王が中国（清朝）皇帝に奉った上表文を集めたもので、楚南家の遠祖の一人であって尚灝王の頃の人、魏學源（ぎがくげん）が編集し注を加えたものである。但し、それは完成しなかったものの如くで、「歴代」といいながら第十三代尚敬王の表文しか収録されておらず、また注釈も前半で途切れている。なお、この書の全体像については、注訳の作業を終えた時点で再述したい。

一、今回は、『歴代表文集』の最初の二篇、すなわち康熙五十一年（西暦一七一二年）十一月六日の表文と、康熙五十五年（西暦一七一六年）十月十一日の表文とを訳出した。

一、原文は、もとより訓点の無い漢文（白文）であり、琉球国の使節はこれを中国語で朗読したこと言うまでもないが、これに返り点を付し書き下し文を添えて読解の便をはかった。なお、本文の体裁を重んじ、改行等は全て本文に従った。但し、書き下し文と現代語訳は内容による大まかな段落区分をするにとどめた。

一、注釈は簡潔を旨とし、訳文を見て判断できる事項は省略した。本文に(1)(2)(3)(4)…として注記したものがそれである。魏學源の原注は詳細なものであり、また中国の注釈の伝統に従って博覧かつ厳密だった。その原注は、本文に①②③④…の数字を付し、そのまま〔魏學源原注〕として

私の注釈の前に載せた。出典等の検討は、後日にゆずることとする。なお私の注釈に原注を引用した場合には訓点を添え、〔魏注〕として明示した。

一、表文は、句末に平仄を合わせることが多く、魏學源はそれを本文右側に書きこんでいる。本稿ではそれに従い、本文右側に、平声は○印、仄声は●印を付して明示した。平声とは、平らな声調の語、仄声とは、仄いた声調の語である。

一、訳文は、あくまでも私の試訳であり、できる限り簡潔で分かり易く、原漢文に沿って訳すよう努力してみたが、誤りや不適当な表現も多いことと思う。御叱正をいただければ幸いである。

※　前回（『沖縄文化研究』第十号所載）の「『歴代表文集』注訳(一)」において既に発表した康熙五十一年十一月六日の表文を、このたびもう一度掲載することになった事情を、以下に説明する。

前回発表時には多方面からの反響があり、責任の重大さを思い知らされた。その中で、特に多くの方々から指摘をいただいたのは、魏學源の原注の全貌を掲示してほしい、との御意見だった。前回、冒頭の凡例説明において、魏學源の原注について、「それを全て再録するのは紙面の都合上不可能に近いので、多くを省略した」と述べ、中国古典の分野ではよく知られている出典の注記などは、そのほとんどを省略したのだった。だが、それを省略せずに、わかりやすい形で明示してほしいとの御意見を、多数いただいたのである。本来、本稿の性格からして、原注の出典を調査、検討し、原注に対する解説を付して公表すべきだろうと考え、その作業に多少とも手をつけたのだが、

今のところ完了はおぼつかない。そのため、とりあえず原注をそのままの形で翻刻することとした。従って前回掲載分についても、体例の統一をはかるために、重複の煩をおかして全部を再掲載することとした。御寛恕いただければ幸いである。

〈本文　Ⅰ〉　康熙五十一年十一月六日表文

琉球國中山王世曾孫(1)、臣尚敬(2)、誠惶誠恐、

①(3)稽首頓首

上レ言。伏以、

皇圖鞏固(4)○、②(5)大二一統之規模一○、

帝德廣敷○、綿二萬年之曆③(6)●數一。

航レ海梯レ山○、極二來④(7)享來王之盛一、

開レ天闢レ地●、昭二同⑤(8)文同軌之休○一。臣民歸レ命●、(9)遐邇傾レ心○。欽惟、

皇帝⑥(10)陛下、

聰明⑦(11)天縱●、

(12)仁孝⑧(13)性成○。

⑨(14)御レ極乘⑩レ乾○、統二百王之治法●一、

敷⑪レ文典⑫レ學●(15)、紹二千聖之心傳○一。

⑬(16)垂レ衣而治無レ爲○、普天荷二堯日之化●一、

⑭(17)揮レ絃而歌鮮レ慍●、率土感二舜風之仁一。臣敬僻(18)海蝸居○、夙沐二
天恩於無限●一、遐(19)陬⑮雉贄●、⑯(20)敢稽二
朝貢之有一レ期○。謹遣二陪(21)臣毛(22)九經・蔡灼等一、恭齎⑰(23)二野
芹之微誠○一、仰繼二臣父之效順●一。伏願
⑱(24)乾綱獨秉●、
⑲(25)泰運長亨○。
⑳(26)候(ママ)甸要荒○、盡入二㉑(27)職方之府●一、
㉒(28)躬桓蒲穀●、悉歸二㉓(29)王會之圖○一。將レ見下(ベシ)金甌㉔(30)永固●、㉕(31)醴

泉與二芝草一偕生、(26)(32)○玉燭常調、(27)(33)○彩鳳共二祥麟一、竝
集上矣。臣敬(34)無レ任二瞻レ
天仰レ
聖、(35)激切屏營之至一、謹奉レ
表、進レ
貢以
聞。
(36)康熙五十一年十一月初六日　琉球國中山王世曾孫、臣尚敬、謹上レ表。

〔訓読〕

琉球国中山王の世曾孫、臣尚敬、誠に惶れ誠に恐み、稽首し頓首して言を上る。

伏して以るに、皇図鞏固にして、一統の規模を大いにし、帝徳広敷して、万年の暦数を綿ぬ。海を航り山に梯し、来享来王の盛を極め、天を開き地を闢き、同文同軌の休ひを昭らかにす。臣民命に帰し、遐邇心を傾く。

欽みて惟ふに、皇帝陛下は、聰明なること天縦、仁孝なること性成。極を御し乾に乗りて、百王の治法を統べ、文を敷き学を典りて、千聖の心伝を紹ぐ。衣を垂れて治為す無く、普天堯日の化を荷ひ、絃を揮ひて歌に慍み鮮なく、率土舜風の仁を感ず。臣敬僻海に蝸居し、夙に天恩に無限に沐し、遐陬より雉を贄とし、敢えて朝貢の期有るを稽せんや。謹んで陪臣毛九経・蔡灼等を遣はし、恭んで野芹の微誠を齎らし、仰ぎて臣が父の効順を継がん。

伏して願はくは、乾綱を独り秉り、泰運の長く亨らんことを。候甸要荒、尽く職方の府に入り、躬桓蒲穀、悉く王会の図に帰せんことを。まさに金甌の永く固く、醴泉と芝草と偕に生じ、玉燭常に調ひ、彩鳳と祥麟と、並びて集ふを見るべし。

臣敬天を瞻み聖を仰ぎ、激切屏営の至に任ふる無く、謹んで表を奉り、貢を進めて以て聞す。

康熙五十一年十一月初六日　琉球国中山王の世曾孫、臣尚敬、謹んで表を上る。

〔魏學源原注〕

① 稽首頓首　『禮』大祝辨九、一曰稽首、二曰頓首。

② 大一統　『春秋經』云、春王正月。胡氏傳云、加王於正者、『公羊』言大一統也。

③ 曆數　國祚也。『論語』完曰、咨爾舜、天之曆數、在爾躬。註云、曆數、帝王相繼次第。

④ 來享來王　『詩』商頌・殷武篇曰、昔有成湯、自彼氐羌、莫敢不來享、莫敢不來王。氐羌、皆夷狄。享、獻貢也。王、世見也。

⑤ 同文同軌　『中庸』云、今天下車同軌、書同文、行同倫。

⑥ 陛下　『幼學須知』云、陛下、尊稱天子。註、陛、階也。天子必有近臣、執兵器、陳于階、以戒不虞。謂陛下者、羣臣不敢指斥天子、故呼在陛下者、因畢達尊之義然耳。

⑦ 天縱　『論語』子貢曰、固天縱之將聖、又多能也。註、縱、猶肆也。言不爲限量也。將、殆也。謙若不敢知□□(二字不詳)。聖無不通、多能乃餘事、故言又以兼之。『照解』云、縱、卽縱律(ママ)、恣其所取的意。

⑧ 性成　『書』云、習與性成。

⑨ 御極　洪範篇曰、皇建其有極。皇、君也、建、立也。極、標準之名。『唐書』李晟傳、詔曰、昔我烈祖承乾坤、蕩滌掃隋季荒莽、體元御極、作人父母。

⑩ 乘乾　『易』、乾卦彖云、六位時成時、乘六龍以御天。又『舊康書』肅宗紀云、出震乘乾、立極開統。

⑪ 敷文　『晉書』夏侯湛傳、論抵疑詮理、本窮通于自天、作誥敷文、流英聲于考悌。

⑫ 典學　『書』說命下云、惟斅學半、念終始典于學、厥德修罔覺。

⑬ 垂衣而治無爲　『易』下係曰、黃帝・堯・舜、垂衣裳而天下治。「正解」云、順時而制衣裳、便是変化、便是無爲、変化無爲、俱在垂衣裳內。

⑭ 揮絃　『人物考』云、舜彈五絃琴、歌南風之詩曰、南風之薰兮、可以解吾民之慍兮、南風之時兮、可以阜(サカン)吾民之財兮。阜、厚也、盛也。

⑮ 雉贄　周成王時、越裳氏獻。

⑯ 稽　遲留地。

⑰ 野芹　謙送禮曰獻芹。註云、芹、水菜也。『春秋』、野人食芹菜味美。欲獻至尊。雖有區區之意、亦已竦矣。

⑱ 乾綱　『晉書』華譚傳云、聖人之臨天下也、祖乾綱以流化、順谷風以興仁。又沈約文云、濟横流而臣九服、握乾綱而子萬姓。

⑲ 泰運長亨　『幼學須知』、『易』泰卦彖辭曰、泰、小往大來吉亨。「本義」云、泰、通也。爲卦天地交而二氣通、故爲泰、正月卦也。『易』上經、泰卦解云、世道清明爲泰。

⑳ 候甸要荒　五服之内、擧四服而成文耳。外有綏服。『禹貢』有甸服。甸在王畿。侯服、侯國之服、近王畿。綏服(ママ)、漸遠王畿。取撫安之義。要服、取要約之義。荒服、去王畿遠矣。五者皆天子服事、故謂之服。

㉑ 職方之府　『周禮』夏官云、職方氏掌天下之圖、以掌天下之地。『周禮』、職方氏掌天下之圖。

㉒ 躬桓蒲穀　五圭之内、亦擧四圭耳、外有信圭。『舜典』曰、輯五瑞。其註曰、公執桓圭、侯執信圭、伯執躬圭、子執穀圭、男執蒲圭。

㉓ 王會之圖　唐太宗、遠方諸國朝貢。顔師古請作王會圖。　王會圖。周武王時、遠方慕義、皆通款于中國。史臣次第其方隅種類、與貢獻方物、作王會解。唐太宗時、遠方諸國朝貢者甚衆。顔師古請作王會圖。

㉔ 金甌　『曆科表』註、金甌、喩國之完固。　金甌之甌、小盆也。今俗謂盌。深者爲甌。盌與椀同。梁武帝曰、國家如金甌無缺。

㉕ 醴泉　『后帖』云、黄帝時、以醴泉爲漿。堯之世、德茂清平、則醴泉出。夏后之時、俊乂在官、則醴泉出。

㉖ 芝草　『古瑞命記』、王者慈仁、則芝草生。

㉗ 玉燭　四時和謂之玉燭。　時序調和曰玉燭。□（一字不祥）言道光照也。出于『爾雅』釋天。　『洛陽伽藍記』、四海晏清、八荒率職、縹囊紀慶、玉燭調辰。又王融策云、庶令日月休徵、風雨玉燭。

〔注釈〕

(1) 世曾孫　世継ぎである曾孫。王位継承者であって、先代のひまごに当る者。『歴代表文集』で見る限り、尚敬は康熙五十八年（西暦一七一九年）まで「中山王」と名宣らず、「中山王世曾孫」と名宣っている。これは、その年まで、何らかの理由で清朝から「中山王」の冊封を受けられなかったためであろう。その理由や経緯は、私には分からないので御教えを乞う。また「世曾孫」という呼称も珍らしい。「中山王世子」という呼称は、早くも察度王朝第二代の武寧が用いているようだが、「世曾孫」という言い方はあまり聞かない。これは、中国側から「中山王」として認知されていたのが、曾祖父の尚貞までであったことを示すだろうか。あるいはまた、先先代、先代との関係が直系でない、などの理由によるものなのであろうか。この点についても御教示をいただければ幸いである。

(2) 臣尚敬　私、尚敬。「臣」は、臣下が主君に対して用いる自称。中山王が「臣」と称するのは、清朝に対して臣礼をとっているため。「尚敬」は第二尚氏王朝第十三代の中山王。

(3) 稽首頓首　うやうやしく礼をすること。「稽首」は、頭を地面にしばらくつけたままにしている礼。「頓首」は、頭を地面にうちつける礼。

(4) 鞏固　しっかりと不動であること。

(5) 大一統之規模　〔魏注〕『春秋經ニ』云ハク、春王ノ正月ト。『胡氏傳ニ』云ハク、加フルニ王ヲ於正ニ者、『公羊ニ』言フ、大イニスルニ一統ヲ也ト。

(6) 暦數　〔魏注〕暦數トハ、國祚也。

(7) 來享來王　諸侯や蛮族の王達が朝廷に来て集うこと。「来享」は、中国の諸侯が朝廷に来て自領の産物を献上すること。「来王」は、蛮族の王が即位した時、中国に来て天子にお目通りをすること。

(8) 同文同軌　天下が統一されること。「同文」は、文字の書体が統一されて同じになること。「同軌」は、車のわだちのはばが統一されて同じになること。

(9) 遐邇　遐くのものも邇くのものも皆。
(10) 陛下　〔魏注〕『幼學須知』云ハク、陛下トハ、尊稱スルナリ天子ヲ。
(11) 天縱　もって生まれた資質。生まれつき。もとは、天が許してほしいままにさせる意。
(12) 仁孝　仁愛が深く親に孝行であること。
(13) 性成　本性が自然に完成すること。
(14) 御極乘乾　至善の道をおさめ、天の気に乘る。「極」は、最高で至善の道。「乾」は、易の卦の名で、天のはたらきを象徴する。
(15) 紹　うけつぐこと。
(16) 垂衣而治無爲　〔魏注〕『易』「繫辭下傳」、黄帝・堯・舜、垂レテ衣裳ヲ而天下治マル。『正解』云ハク、順ヒテレ時ニ而制スレバ衣裳ヲ、便チ是レ變化シ、便チ是レ無爲ナリトモ、變化ト無爲ト、俱ニ在リト下垂ルルノ衣裳ヲ内ニ上。
(17) 揮絃而歌鮮慍　〔魏注〕『人物考』云ハク、舜彈ジ五絃琴ヲ、歌ヒテ南風之詩ヲ曰ハク、南風之薰ゼル兮、可シ以テ解ク吾ガ民之慍ヲ兮、南風之時ナル兮、可シト以テ阜ンニス吾ガ民之財ヲ兮。阜トハ、厚也、盛也。
(18) 蝸居　かたつむりのように、小天地にすまわっていること。
(19) 遐陬　とおい片田舎。
(20) 敢稽朝貢之有期　どうして朝廷への貢物の期限を遅らせたりしましょうか（いえ、決して遅らせません）。「敢」は、反語。「稽」は、とどこおらせる、遅らす意。〔魏注〕稽ハ、遲留也。
(21) 陪臣　天子の家来である諸侯の家来。
(22) 毛九經・蔡灼　中山王の臣下の名。伝未詳。

(23) 野芹　野の芹。粗末でも心のこもった品のたとえ。琉球からの献上品を謙遜して言った語。〔魏注〕『春秋』、野人食スルニ芹菜ヲ味美シ。欲スレ獻ゼント至尊ニ。雖モレ有リト區區之意、亦已ニ疎ンゼル矣。見ユ『幼學須知』。

(24) 乾綱　君主の大権。「乾」は注(14)参照。「綱」は、大づな。多くのひもをまとめたもので、天子が万物を統率することにたとえる。

(25) 泰運長亨　太平の機運が長く障り無く続くこと。「泰」は、やすらかなこと。また、易の卦の一つで、安泰の象徴。

(26) 候甸要荒　天下のあらゆる区域。王城のまわり千里四方を王畿と呼び、その外の地域を五百里ごとに区分し、侯服・甸服・綏服・要服・荒服と呼んだ。これを五服という。本文に「候」とあるのは、「侯」の誤記。〔魏注〕五服之内、擧ゲテ四服ヲ而成スレ文ヲ耳ニシテ、外ニ有リ綏服。

(27) 職方之府　職方氏の役所。「職方」は、職方氏で、『周礼』夏官に記される官職名。天下の地図と土地をつかさどる役職。

(28) 躬桓穀　天下のあらゆる諸侯。天子が諸侯を封じる際、身分に応じて桓圭・信圭・躬圭・穀圭・蒲圭の五種の玉を授けた。この玉を、五圭または五瑞と呼ぶ。〔魏注〕五圭之内、亦擧グル四圭ヲ耳ニシテ、外ニ有リ信圭。

(29) 王會之圖　唐の太宗に多くの遠方の諸国が朝貢に参じたため、顔師古がそのありさまを描かせた図。

(30) 金甌　黄金のかめ。国家が完全に堅固であることにたとえる。〔魏注〕『曆科表』註、金甌ハ、喩フ國之完固ナルニ。金甌之甌ハ、小盆也。今ノ俗ニ謂ヒテ盌ノ深キ者ヲ爲スレ甌ト。盌ト與ハレ椀同ジ。

(31) 醴泉　甘い水の湧く泉。瑞象の一つ。〔魏注〕『后帖』ニ云ハク、黄帝ノ時、以テ醴泉ヲ爲スレ漿ト。堯之世、德茂清平ナレバ、則チ醴泉出ツ。夏后之時、俊乂在レバレ官ニ、則チ醴泉出ツ。

(32) 芝草　さいわいだけ。吉祥を示す神草。〔魏注〕『古瑞命記』、王者慈仁ナレバ、則チ芝草生ズ。
(33) 玉燭　四季の気候が調和すること。
(34) 無任　たえきれない。しのびきれないこと。
(35) 激切屏營　激しく恐れおののくさま。自己が不徳であるために、天子を仰ぐと恐れが生じる意の謙辞。「激切」は、非常に激しいさまを表す入声の畳韻語。「屏営」は、恐れおののくさまを表す平声の畳韻語。
(36) 康熙五十一年　西暦一七一二年。時に聖祖康熙帝（愛親覚羅玄燁）の治世の最盛期で、清朝の国威が最もふるった時代であった。

〔訳文〕

琉球国中山王の世継ぎの曾孫たる臣尚敬は、心よりおののき心よりかしこみ、首を地につけ額を地面にうちつけして、言葉を申し上げます。

伏して思いますに、天子のはかりごとがゆるぎないので、天下を一つに統べる手本である御治世は大いなるものとなり、天子の徳が天下に敷き広がっているために、皇国の御代は万年もの年月をつらねて続いておられます。（とりわけ今は）海を渡り山に梯をかけて、諸侯は朝廷に貢を献げ、四方の蛮族の王はひきもきらずにお目通りに参上し、その盛大さを極めております。（また天子は）天と地とを初めて切り開き、文字を統一し軌を統一して天下をまとめ治める恩恵を輝かしく示しておられます。臣下と人民は皆、御命令になつき順い、遠い者も近い者も、天子に心を寄せております。

つつしんで思いますに、皇帝陛下の總明であられることは、天が与えて自由に用いることを許され

たものであり、その恵み深くいつくしみ深い御心は、生まれつきの天性が完成いたしたものであります。正しい道をつかさどり、天の気に乗り、百代の帝王の政治の方法を統べおさめ、文化を敷き広め、常に学問を深めて、千代の聖人達の心から心へ伝えられた真理を受け継いでおられます。衣を垂れ、政治むきのことは何ひとつなさらずとも、大空の下の万民は、かの堯の時の太陽が万物を作り育てたと同じ恩恵を受け、琴の絃をつまびいて人々のうたう歌に慍みは無く、大地の上の万民は、かの舜の時の風がとどけてくれたと同じ仁愛を感じ取っています。

臣敬は僻遠の海中に蝸の如くに住みなし、夙くより天子の御恩を限り無く遠いこの地に於いて受け、遠い世界のかたすみより雉の贄を献上して、決して朝貢の期日をおくらせることなどはございません。（このたび臣は）つつしんで天子の陪臣にあたる毛九経・蔡灼らを遣わし、うやうやしく野の芹の如き粗末な貢物にささやかな誠をこめて献上し、上を仰いで臣の父祖が恭順を尽くしたのを継ごうと思います。

伏して願いますには、天子の大権をただ独りにてとり行ない、やすらかな御運が永遠に続きますことを。侯服・甸服・要服・荒服などの全ての土地が、（周の天下の土地を管掌した）職方氏の府庁に入れられるように天子の下におさめられ、躬圭・桓圭・蒲圭・穀圭を持つ爵位ある貴族の全てが、（唐の太宗に朝貢する諸国の使節を描いた）「王会図」におさめられるように帰順しますことを。今こそまさに、黄金の甌ともいうべき国家が永遠に強固で、治世のあかしである醴き泉と芝草とが地中

より生じ、四時の気候が永遠に調和して、彩(あでやか)な鳳(おおとり)と祥(めでた)い麟(きりん)とが共に集まる聖(ひじり)の御代が見られようとしております。

臣(わたくし)敬は、天を望み聖天子を仰ぎ見、我が心があまりに激しく恐れおののくにたえきれず、つつしんで上表文をたてまつり、貢物を献じ進めて、上聞に達するよう在し上げます。

康熙五十一年十一月六日　琉球国中山王の世継ぎの曾孫たる臣(わたくし)尚敬がつつしんで表を上(たてまつ)ります。

〈本文　Ⅱ〉　康熙五十五年十月十一日表文

琉球國中山王世曾孫、臣尚敬、誠惶誠恐、

稽首頓首、謹奉レ

表上レ言。伏以、

帝徳遍二乾坤(1)○一、中國覲二昭①光之盛●一、

皇恩彌②③(2)●宇宙一、(3)海疆沾(4)二熙皞(5)之隆○一。

開二閶闔(6)於九天(7)○一、

(8)肅二衣冠於萬國●一。普天慶溢(9)●、率土歡騰(10)○。恭惟、

皇帝陛下、

慮④周二萬物●一、

道貫⑤二百王(11)○一。

教レ孝教レ忠○、作二千古君父(12)之謨訓(13)●一、

制レ儀制レ禮●、昭二百代聖賢(14)之典型○一。

(15)⑥候甸(ママ)要荒○、盡入二(16)職方之府●一、

(17)桓蒲穀●、悉歸二王(18)會之圖○一。臣敬僻二處海疆○一、代

供二貢職(19)●一。⑦(20)胙レ土分(21)⑧レ茅○、隆二

聖朝之大典一、請レ

封襲レ爵●、守二先世之微忱(22)○一、謹遣二陪臣夏執中・蔡溫

等○一。仰請二

⑨(23)○綸音一、望二

⑩(24)龍墀一而悚(25)●慄。承レ祧(26)襲レ爵●、瞻二

鳳⑪誥以遙頒○一。伏願

覆育同レ天○、

光輝帀レ地●。

合レ軌同レ文○、因二舊典一以廣二新典●一。

建レ官分レ職●、由二内(27)臣一而及二外(28)臣○一。將レ見下文(29)麟獻レ瑞●、

永享二熙熙(30)之盛一、丹鳳⑬來儀(31)、長歌中⑭皞皞(32)之風上

〔皞皞之風○〕矣。臣敬無レ任二瞻レ

天仰レ

聖、(33)激切屏營之至一、謹奉レ

表、恭

進以

聞。

(34)康熙五十五年十月十一日　琉球國中山

王世曾孫、臣尚敬謹上レ表。

〔訓読〕

琉球国中山王の世曾孫、臣尚敬、誠に惶れ誠に恐み、稽首し頓首し、謹んで表を奉じて言を上る。

伏して以るに、帝徳乾坤に遍くして、中国昭光の盛に覲え、皇恩宇宙に彌くして、海疆熙皞の隆に沾ふ。閶闔を九天に開き、衣冠を万国に肅ふ。普天慶溢し、率土歓騰す。

恭みて惟ふに、皇帝陛下、慮は万物に周く、道は百王を貫く。考を教へ忠を教へて、千古君父の謨訓と作し、儀を制し礼を制して、百代聖賢の典型を昭らかにす。候甸要荒、尽く職方の府に入り、桓蒲穀、悉く王会の図に帰す。臣敬海疆に僻処し、代々貢職を供せり。土を胙ひ茅を分かちて、聖朝の大典を隆にし、封を請ひ爵を襲ひて、先世の微忱を守り、謹んで陪臣夏執中・蔡温等を遣はす。仰ぎて綸音を請ひ、龍墀を望みて悚慄す。祧を承け爵を襲はんとし、鳳誥の以て遥かに頒たるるを瞻ん。

伏して願はくは、覆育の天と同しく、光輝の地に帀からんことを。軌を合はせ文を同しくし、旧典に因りて以て新典を広めんことを。官を建て職を分かち、内臣に由りて外臣に及ぼさんことを。将に文麟瑞を献じ、永く熙熙の盛を享め、丹鳳来儀し、長く皞皞の風を歌はんとす。

臣敬天を瞻み聖を仰ぎ、激切屏営の至に任ふる無く、謹んで表を奉り、恭んで進めて以て聞す。

康熙五十五年十月十一日　琉球国中山王の世曾孫、臣尚敬、謹んで表を上る。

〔魏學源原注〕

① 昭光　『漢書』楊雄傳、昭光振耀、蠁習如神。『字彙』、蠁習、神速貌。

② 彌　徧也。

③ 宇宙　『類書』云、上下四方日宇、住古來今曰宙。

④ 慮周　『文心雕龍』云、平子淹通、故慮周而藻審、仲宣躁鋭、故頴出而方果。

⑤ 百王　『北史』儒林傳序、百王損益、一以貫之、雖世或汙隆、而斯文不墜。

⑥ 甸　音電。

⑦ 胙土　『左傳』天子建德、因生以賜姓、胙之土、而命之氏。又『魏志』武帝紀、朕聞先王竝建明德、胙之以土、分之以民。『字彙』、胙音祚、建置社稷曰胙。

⑧ 分茅　祭邑『獨斷』、天子大社、以所封之色、苴（包也）以白茅授之、謂之授茅土。又呂大一「土賦」、封割五色、分茅錫社。『白虎通』、人非土不立、封土立社、示有上也。又唐昭宗册雅王文曰、周文之嗣、分茅土者十五國。

⑨ 綸音　『幼學須知』云、皇帝之言、謂之綸音。『記註』云、『禮記』云、王言如絲、其出如綸、王言如綸、其出如綍。

⑩ 龍墀　『歷科表』、龍墀春暖、合萬國以長春。注云、殿前堦上地爲墀、墀有龍尾道。

⑪ 鳳誥　鳳誥之鳳、其出于鳳詔之鳳歟。崔峒詩、有鳳詔鳴珂已訝遲之句。『鄴中記』、石季龍與皇后在觀、上有詔書、銜木鳳口中、放數百丈緋繩、廻轉飛下。

⑫ 熙熙　『字彙』、熙熙、和樂貌。『左傳』、季札請觀於周樂、爲之歌「大雅」曰、廣哉熙熙乎。又『汲冢周書』、王子晉曰、萬物熙熙、非舜而誰。

⑬ 來儀　『論語』子罕篇、鳳鳥不至。註、舜時來儀。『書經』云、鳳凰來儀。注云、來儀者、來舞而有容儀也。

⑭ 皡皡　『孟子』盡心篇、王者之民、皡皡如也。註、皡皡、廣大自得之貌。

〔注釈〕

（1）乾坤　天と地。易の二つの卦（か）の名で、乾はすべてが陽、坤はすべてが陰の卦である。それぞれが天と地とを象徴し、両者で天地を意味するようになった。

（2）宇宙　空間と時間。宇は、四方上下で、空間を表す。宙は、古今のことで、時間を表す。〔魏注〕『類書』云、上下四方ヲ曰ヒレ宇ト、住古來今ヲ曰フトレ宙ト。

（3）海疆　海のはて。ここでは琉球国をいう。

(4) 沾　うるおう。「霑」と同じ。しかしまた、うかがう、という意味もあり、それならば「覘」と同じ。「海疆」が清朝皇帝の恩徳に「霑」い、また清朝皇帝の恩徳をあおぎ「覘」っていることを兼ねて意味させた措辞だろう。

(5) 熙皞　あきらかにかがやく。「熙」は、かがやく。「皞」はあきらか。また、やわらぎみちたりる意と解することもできる。「熙」は、やわらぐ、たのしむ。「皞」は、みちたりる。前の句の「沾」の両義性に対応させて、「熙皞」にも二重の意味あいをもたせているか。

(6) 閶闔　天上界の門。そこから、宮廷の門をいう。

(7) 九天　九重の天。高い空をいう。転じて宮延の意。

(8) 肅　ととのえる。

(9) 慶溢　よろこびがあふれる。「慶」は、よろこび、いわい。初唐の劉允濟の「明堂賦」に、「澤ハ被ニ翔泳ヲ一、慶ビハ溢ル二煙霄ニ一」とあるが、魏注はそれをひいていない。

(10) 歡騰　よろこんでおどりあがる。

(11) 百王　多くの王。また、百代の帝王。〔魏注〕『北史』儒林傳序、百王損益スルトコロ、一以テ貫クレ之ヲ。雖ヘドモ三世ニ或リト二汙隆一、而斯文不レ墜チ。ただし、魏注のひくところよりも古く、『荀子』不苟篇、『漢書』董仲舒傳などにみえる言葉である。

(12) 父　この字の右側に、本文と同じ大きさの文字で「師」と書きこみがある。しかし書体は本文と明らかにちがっている。誰のどのような性質の書きこみか分からないが、「君父」を「君師」とした方がよいか、との見解だったのだろう。

(13) 謨訓　国家の大計と後世のてほんになるおしえ。「謨」は、国家のはかりごと。「訓」は、教訓。『書經』胤征篇、「聖二有リ二謨訓一。」

(14) 聖賢　この二字の右側に、本文と同じ大きさの文字で「神聖」と書きこみがある。注(12)と同様、こちらをよしとする、またはそうしたほうがよいか、という見解を示す書きこみだろう。

(15) 候甸要荒　『歴代表文集』注釈〈本文Ⅰ〉の原注⑳及び注(26)を参照。

(16) 職方之府　同前原注㉑及び注(27)を参照。

(17) 桓蒲穀　同前原注㉒及び注(28)を参照。

(18) 王會之圖　同前原注㉓及び注(29)を参照。

(19) 貢職　みつぎもの。「貢」も「職」もみつぎものの意。『淮南子』原道訓、「四夷納ムレ職ヲ」。

(20) 胙土　土地をたまわる。領国をたまわって諸侯に封ずること。〔魏注〕『左傳』天子建テレ徳ヲ、因リテレ生ニ以テ賜フレ姓ヲ。胙ヒ二之ニ土ヲ一、而シテ命ズ二之ニ氏ヲ一。又『魏志』武帝紀、朕聞ク、先王竝ビテ建テ二明徳ヲ一、胙フニレ之ニ以テシレ土ヲ、分ツニレ之ニ以テストレ民ヲ。『字彙』胙、音祚。建二置スルヲ社稷ヲ一曰フレ胙ト。

(21) 分茅　領土をあたえて諸侯にする。宮廷に五色の土でつくった壇があり、人を諸侯にする際に、その方角の土を茅でつつんであたえたことによる。

(22) 微忱　ささやかなまごころ。誠意を謙遜したことば。「忱」は、まごころ。

(23) 綸音　天子のおことば。〔魏注〕『幼學須知二』云フ、皇帝之言、謂フト二之ヲ綸音ト一。『記註ニ』云フ、『禮記二』云フ、王言如シレ絲ノ、其ノ出ヅルヤ如シレ綸ノ。王言如シレ綸ノ、其ノ出ヅルヤ如シトレ綍ノ。

(24) 龍墀　天子のきざはし。「墀」は、きざはしの上にあるかざりぬりをした地面。また、そのようにしたきざはし。「龍」は、天子にかかわりのあるものにつける美称。また、「墀」につづいている道を「龍尾道」というので、それをさすとも考えられる。〔魏注〕『歴科表』、龍墀春暖、合シテ二萬國ヲ一以テ長ヘニスレ春ヲ。注ニ云フ、殿前階上ノ地ヲ爲スレ墀ト。墀ニ有リ二龍尾道一。

(25) 悚慄　おそれおののく。おそれて身がふるえる。清朝皇帝の威厳に身がすくむ意。

(26) 祧　みたまや。遠い祖先の廟。また、始祖の廟。廟（みたまや）は、先祖の位牌をまつり、祖霊の来臨をあおぐ建物。

(27) 内臣　天子に直属する臣下。中国の朝廷の臣下。

(28) 外臣　諸侯の臣下。中国に服属している外国の朝廷の臣下。

(29) 文麟　うつくしい文様のある麒麟。麒麟は想像上の動物で、聖人が世に出ると現れるという。

(30) 熙熙　やわらぎ楽しむさま。〔魏注〕『字彙』熙熙トハ、和樂スル貌ナリ。

(31) 來儀　鳳凰が飛んできて、りっぱなすがたでいること。〔魏注〕『論語』子罕篇、鳳凰不レ至ヲ。注、舜ノ時ニ來儀セリ。『書經』ニ云フ、鳳凰來儀スト。注ニ云フ、來儀ト者、來タリ舞ヒテ而有ルニ容儀一也ト。

(32) 皡皡　心がゆったりしてみちたりているさま。〔魏注〕『孟子』盡心篇、王者之民ハ、皡皡如タル也。註、皡皡トハ、廣大自得之貌ナリ。　なお、魏注は、『孟子』の注として宋の朱熹の注をとっており、漢の趙岐の注をとっていない。だから魏學源が朱子学の立場をとっていたと短絡させることはできないが、沖縄の漢学の実状を考察するには、おもしろい資料であろう。また、この部分の本文は、次行の「皡皡之風」を後人が見せ消ちにして、その四文字を波線部に書きなおしている。行文の体裁を、そのように改めるべきだとしたのだろうか。

(33) 激切屏營　『歴代表文集』注訳〈本文Ⅰ〉の注(35)を参照。

(34) 康熙五十五年　西歴一七一六年。康熙帝の文化事業の中でも特に有名なものの一つである『康熙字典』四十二巻（収載親字数四万九千余）が完成した年にあたる。

(補注)　〈本文Ⅱ〉の上表文は、尚敬が中山王の王位を請求したもののように思われる。また、そこに派遣使節として名のみえる夏執中・蔡温についての詳細はわからないが、後者は、のちに尚敬王の名宰相とうたわれた蔡温その人であろう。

〔訳文〕

琉球国中山王の世継ぎの曾孫たる臣尚敬は、心よりおののき心よりかしこみ、首を地につけ額を地面にうちつけして、つつしんで上表文をたてまつり、言葉を申し上げます。

伏して思いますに、天子の徳は天地にあまねくゆきわたり、中国はひかりかがやく盛世にまみえております。天子の御恩は世界にあまねくみちみち、海のはて（の琉球国）さえもあきらかにかがやく隆んさをうかがっております。（また天子は）天の門を大空に開かれ、衣冠を万国にととのえておられます。広い天のもと慶びはあふれ、すべての大地の上では人々がよろこびおどりあがっております。

つつしんで思いますに、皇帝陛下の御考慮は万物の上にあまねく及び、その体現しておられる道は百代の帝王を一貫したものであります。考の道をおしえ忠の道をおしえて、永遠の君父のてほんを作り、のりをさだめ礼をさだめて、百代の聖人賢者の典型をあきらかにされました。いまや侯服・甸服・要服・荒服などの全ての土地が、（周の天下の土地を管掌した）職方氏の府庁に入れられるように天子の下におさめられ、　圭・桓圭・蒲圭・穀圭を持つ爵位ある貴族の全てが、（唐の太宗に朝貢する諸国の使節を描いた）「王会図」におさめられるように帰順しております。

臣敬は、海のはてのこの地に遠く住みなし、代々にわたってみつぎものをおとどけして参りました。領土を賜わり諸侯に封ぜられて、聖い中国の朝廷の大いなる武典をさかんにいたしたく、（琉球

王に）封ぜられんことを請い（琉球王の）爵位を継ぎ、先代よりのささやかな誠意を守りつづけて行きたく、ここに謹んで天子の陪臣にあたる夏執中・蔡温らを遣わします。仰ぎみて天子のお言葉を請いねがえば、宮殿のきざはしを遠く望むだけでも、おそれに身がおののきます。（それでも）先祖のみたまやをうけついで爵位をつぎ、天子のみことのりがはるか遠いこの琉球にもおわかちいただけるのをあおぎみたいと存じます。

伏して願いますには、天子が万民をいつくしみはぐくむこと天とひとしく、天子のまばゆい輝きが地上のすべてにめぐらされますよう。文字を統一し軌を統一して、古くからの典によって新しき典を広められますよう。官位を建て官職を分け、中国の臣下よりはじめて外藩たる琉球国の臣下にも及ぼし下さりますよう。今やまさに、うるわしい麒麟がめでたいきざしを献上し、永く万民のやわらぎ楽しむ盛世をすすめ、丹い鳳凰がきたり舞い、長く万民がやわらぎみちたりた風俗をうたうすがたが見られようとしています。

臣敬は、天を望み聖天子を仰ぎ見、我が心があまりにも激しく恐れおののくにたえきれず、つつしんで上表文をたてまつり、うやうやしくみつぎものを進めて、上聞に達するよう申し上げます。

康熙五十五年十月十一日。琉球国中山王の世継ぎの曾孫たる臣尚敬がつつしんで表を上ります。